

教育長室だより

第 31 号

2022.1.14

厳寒の候、例年にも増して寒さを厳しく感じる毎日です。

オミクロン株の登場で新型コロナウイルス感染症は、懸念されていた第6波が国内でも本格的に広がってきています。落ちついた日々が戻ることを国民誰しもが望んでいましたが、平穏な日々までの道のりは短くないようです。コロナウイルスとそして厳しい経済状況とみんなで闘って乗り越えなくてはなりません。

○

先日、徳島新聞に「論考2022 1月」という記事が載っていました。記事の筆者は磯野真穂（いその・まほ）という人類学の研究者です。この記事が意味するものに触発されるところがあり、今回はこの記事の内容について考えてみようと思います。読んでいない方もおられると思いますので、記事を紹介しながらいろいろと考えていきます。

○

記事の内容は新型コロナウイルス感染症がもたらした「新しい生活様式」に関するものでした。コロナ禍が終息した後の社会をアフターコロナ、新型コロナウイルス感染症がインフルエンザと同じように常に世の中に存在する世界をウィズコロナと呼ぶようですが、このアフターコロナ、ウィズコロナの時代の生活の仕方が「新しい生活様式」ということです。

○

筆者は「この新しい生活様式には良い面もあったと言われている」と言います。

たとえば無駄な会議が無くなった、満員電車に乗らなくて良くなった。また、つまらない飲み会に参加させられなくなった、などの例が挙げられています。無駄な会議の「無駄な」やつまらない飲み会の「つまらない」などは“本当にそうですか？”とツッコミたくなりますが、おおむね理解できます。結果、無駄と無理強いがあぶり出され、“不要不急”の名の下に取捨され、快適な生活を手にれたというのです。

○

一方で、よく聞いてみると大きな声で言えない本音の部分が見えてくるとも言えます。たとえば、感染予防のために運動会を半日にした学校で、保護者が「楽」だからこれを続けてほしいと言う声が届く。町内会のイベントの中止で広報や準備など大変な作業がなくなって「楽」になった。病院のお見舞いの制限で患者家族との応対がなくなって病院や施設が「楽」になった。大学の講義がオンラインになって教室に行かなくて良いので学生も教員も「楽」だということも本音としてあるだろう。というわけです。

○

いずれにしてもキーワードは「楽」です。筆者は「人間はできるかぎり楽をしたい生き物だ」と断言します。「楽」というのは“面倒くさいことから逃れる”ことです。

そして、生きていく上で逃れがたく面倒くさいものは「身体」と「他者」だと言います。動けば疲れて眠くなり、ほおっておけば髪が伸び、体が臭くなります。また、生きていくということは他者と関わるということになります。「他者との関わりで自分が傷つくこともあり、人に迷惑をかけないために言葉や行いに気を遣ったり、身なりを整えたりすることはいくら面倒くさくとも避けられないこと」です。「身体も他者も人生の大切な味わいでもあります但同时に疲労の源泉でもある」ということです。コロナ禍で人との関わりが減ることが「楽」と通じるのだと言います。

○

面倒くささ、煩わしさは無くなっていくと次々に新しい煩わしさが生まれてくると言います。人間は進化の過程で人間の様々な機能を少しずつ人間の外に押し出してきた（フランスの人類学者の言葉）。たとえば「足で移動する作業を自動車に押し出す。手でハンドルを切る作業を運転者へ押しだし、さらに自動運転に押し出す」。

というわけでわたしたちはどこまでも「楽」を追求してきたのです。コロナ禍がそれに拍車をかけているというのが筆者の考えです。

○

社会生活の様々な場面で多くの行事・イベントが中止や延期になりました。対面で業務を進めてきた様々な出張も中止やオンラインに代替されました。合理的で楽な形になっています。

ある会で中止を話し合っていたときに「易きに流れていませんか」という発言が聞かれることが何度かありました。“そうではない”とも“そうかもしれない”とも思いました。

感染によって学校を休業し、その当日や事後の対応をせざるを得なくなったり、感染者の人権を守るための配慮に苦心したりする経験や、保護者や地域から責任を追及されることも珍しくない状況がありましたから、なんとしても感染を防ぎたい、そのための措置は万全にしたいというのは間違いなく教育関係者にはあります。

一方で様々な行事の中止や縮小は確かに「楽」でもありました。

○

アフターコロナ、ウィズコロナの世界にはコロナ以前の世界がそっくりそのまま復活することはないと思われます。コロナ禍が合理性や効率を考える機会になったからです。これは新しい生活様式のメリットだろうと思います。コロナ禍はわたしたちの社会の習慣やルーティンとされてきたことについてその本質を見直すきっかけにもなっていくはずです。運動会はなぜするのか、修学旅行の意義は何か、それぞれの行事・イベントの趣旨と必要性について考え直すことは決して無駄ではありません。

議論も必要になるかと思いますが、その上で、いくら面倒くさくても煩わしくてもやるべきことの意義を皆で共通理解して進めていくことができれば、その趣旨を高いレベルで全うすることにつながる…それを望みたいし、そうなると思います。

○

アフターコロナの世界が“災い転じて福となす”“雨降って地固まる”という世界になるかならないかはわたしたちにかかっているのでしょう。皆で考える良い機会だと思ふところでは。